

便定期航密

助英園中



中 蘭 英 助

密 航 定 期 便

ポケット・ライブラリ

42

新 潮 社 版

密航定期便

著 者 中 蘭 英 助

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社
会社

東京都新宿区矢来町71番地

電話東京(341) 7111—9番

振 替 東 京 8 0 8 番

印 刷 所 二光印刷株式会社

製 本 所 憲 専 堂 製 本 所

定 価 2 2 0 円



1963年5月5日 印刷

1963年5月10日 発行

乱丁，落丁本は本社又
はお買求めの書店にて
お取替えいたします。

中 蘭 英 助

密 航 定 期 便

ポケット・ライブラリ

42

新 潮 社 版

目次

序章	対馬上島・九月十六日	七
第一部	国境の島	二三
第二部	海峡の狩人	九〇
第三部	晩夏の薔薇	一八七
終章	特急朝風・九月三十日	二八五
あとがき		三〇〇



密航定期便

主要登場人物表

西条卷夫……日本貿易新聞記者・河合藤雄とも名乗る。最上労働心理相談所の調査員。失踪した

大韓実業の女秘書を追って、国際スパイ戦に活躍。

崔徳天(チエ・トクチユン)……貿易商社・大韓実業の社長。日本育ちで、日韓交渉に不満をも

ち、本国のタングステン利権をねらう政商。

崔必善(チエ・ビルスン)……大韓実業の京城常駐の専務取締役。徳天の叔父。

鄭寿甲(チユング・スカップ)……バン・コリアン・レヴユー社の社長。南北朝鮮の平和統一運

動をしている。本国の政治家林志化の娘婿。

李光万(イ・カングマン)……バン・コリアン・レヴユー社に籍をおき、地下活動をする青年。

沈烈(チン・ユール)……過激な極左理論をもつ、日本亡命中の老革命家。

金順七(キム・スンチール)……本国地下組織から派遣された代表者。

高野恵子……化粧品的女行商人。李光万と同棲していたことがある。

最上亀行……最上労働心理相談所の所長。労務研究出版社の社長も兼ねている。

甘地……労働心理相談所のディレクターで所長の輔佐役。

南秋姐(ナム・チューヒ)……対馬上島に出稼ぎ中の朝鮮人海女。若い寡婦。

多田留太、修次……海女舟の船頭と綱持。

鎌池警部補……上対馬署、比田勝派出所長。

自称仲買人……ボクサーくずれで、西条を尾行する謎の朝鮮人。

序 章

対馬上島・九月十六日

対馬^{つしま}上島^{かみのしま}の北端から、藍色にかすんで見える朝鮮半島の山影をうかべた朝鮮海峡にむかつて、八ツ手の葉のように段丘をつき出したリアス式海岸には、アオギタと呼ばれる北風がしきりに吹きつけていた。

鳶が海岸段丘の上を、低く舞っていた。

六月から夏中吹く南風のシロバエには、肌をなぶる爽やかさがあるが、九月のアオギタには、肌を粟立たせる鋭さがある。陽は輝いていても、空にも海にも、黒い翳りがある。三年吹かねば長者になるのだが、と土地の人は恐れる。塩をふくんだ風が、刃こぼれのした貪婪な凶刃のように、沿岸一帯に水田を作らせず、畑作をなぎはらってしまうのである。

鳶が舞って消えたあたり、リアス式海岸の根っこに、西泊湾^{にしどまりわん}の奥深く抱かれて、上島一番

の良港、比田勝港^{ひたかつこう}がある。そこから、何か見えない紐に一直線にひき出されてくるように、上対馬警察署比田勝警部補派出所の警備艇が、白い波をけたててあらわれた。

旧日本軍の砲台跡のある丸崎から、沖椎根島^{おさしいねしま}のそばをぬけて、東北東へ二マイル、十三ヒロの海底にあったという朝鮮人密航女性の水葬死体の搜索をおこなうためである。

潜水夫のほかに、海女舟の船頭、多田留太が、案内者として同乗していた。早朝、海女の南秋姐も発見者として出頭をもとめられていたが、彼女は頑固に、その前夜から風邪気味で気分がすぐれないといって、丸崎の近くの浦にある海女部屋を、一歩も出ようとしなかった。

多田留太がしつこく同行をせまると、秋姐は突然、顔だけふりむけ一声さげんだ。

「パカヤロー」

熱をもつて腫れ^は上ったような赤い^{まぶた}瞼の下から、ギラギラ光る眼が、彼をにらみつけていた。

あと二週間そこそこの漁期である。これ以上、秋姐を怒らせたら、仲買人の玄海商会のオヤジから大目玉をくらうにちがいない。それに警察の方は、もともとこいつら朝鮮人をもてあましているんだから、何とか言訳がつくだろうと留太はあきらめて、事件を一人でしませる覚悟をかためたのだ。

漁期は、たしかに九月いっぱいだった。アオギタは、土地の人々にとつての大敵であるばかりではなかった。対馬上島の沿岸をわたりあるく、海の遊牧民たちの漁期のおわりを告げ

るのである

南秋姐もその一人である朝鮮海女が、いつ頃からここに入りこんできたかは、定かでない。戦前からともいわれ、戦後急速に増えてきたともいうが、彼女たちは皆、済州島出身の海女である。対馬下島の曲部落には、明治まで藩主から士分の扱いをうけて海士と呼ばれた日本人海女がいるが、これがハツコ繩という腰紐一本の全裸でやる数百年来の伝統的な漁法を守っているのに対して、朝鮮海女はエア・コンプレッサーによる潜水器漁法を得意とするので、その収穫は段ちがいである。恐れと妬みとをまじえた眼で見守られてきたのである。

沿岸の漁村に世帯をむすんで、定着している者もあるが、大部分は日本本土の朝鮮人部落から三、四月から九月まで、鮑、榮螺の漁期をかぎって、島へ出稼ぎにやってくる。異国に住んで、半年間だけ、郷愁のように李ラインのむこうの母国を望見する海にわたってきて働く、季節労働者なのであった。

海上の郷愁は、海底の岩肌にいるとき、もっと切実なものとなる。漁期のおわりがせまる、と、一日、七時間も八時間も潜りっぱなしということさえある。入漁料は土地の漁業協同組合に支払ってあるし、獲れるだけ獲って、冬の半年間、来年の漁期にそなえてせっせと榮養を五体に仕込み、脂を皮下にたくわえられるだけの余裕を、稼ぎ出さなければならない。半年休ませた体で、半年働き、三十代になると、急速に老い朽ちてゆく。章魚が、自分の足を食うような生活である。いっそのまま、海底をあるきつづけて済州島に上陸し、懐かしい

故郷朝鮮の土をふんできたという衝動にさえおそわれる。一瞬にして、そのときすべてが、切なく胸をかすめさるのだった。赤い禿山、ひびわれた土地、柳の木のある泥んこ道、傾きかけた草葺屋根……

前日の午後、丸崎の舟着場から東北東へ二マイル、十三ヒロの海底で、手カギをふるって鮑を岩からはがしていた、南秋姐の胸にわいた感慨もそれだった。しかしすぐに、それをふき飛ばすような出来事がおこったのである。

海上をアオギタが吹くように、海中にも潮の流れがある。流れにさからって、前進しながら採取するのが貝取りの技術だが、その流れがふいに変った。秋姐は足をとられて、下半身がういた。一漁期に四着も用意しなければならぬゴム引の潜水服にかまけて、今年は靴底に鉛の力金ちからがねをはめこんだ三千五百円ばかりの潜水靴が新調できず、運動靴をはいたままの作業だったからである。水温がにわかには下し、灰緑色に濁った渦潮の流れが、はすかいにさしこまれた棒のように、股間を圧迫しながらすりぬけてゆくのがハッキリと感じられた。

秋姐は尿意をもよおした。昼飯のとき舟に上ったつきり、四時間も潜りっぱなしである。

しかし彼女はヘルメットの中で頭を傾けて、無意識に排気弁キリツブの支柱をこづきあげ炭酸ガスを海中に放出する排気キリツブの操作をしながら、身をよじって浮力を背中にあつめ、面ガラスの奥からくもった視界に眼をこらした。細い眼は、驚愕きやうがくのために、大きく切れ上ったように見開かれていた。

秋姐は恐ろしいものを見たのである。トンガリ帽の殻頂かくだうをふって、岩礁の肌を踊るようにすべて移動する、栄螺の一群に驚かされたのではない。それも時季からすればまだ早く、たしかに異変とはいえた。さかしまに転倒すれば、栄螺は二度とおき上げず小さな生命を失う危険をおかしていたからである。異変は彼らを追って、音もなくズズッと岩礁を泡立てながら、彼女の面ガラスの直下に海草のなびいている凹所にすべりおりてきたものからおこったのだ。

異変はただちに、海上へつたえられた。左舷の水面に上ってくる気泡で、海女の潜水位置を目測しながら、風上にたえず舟の舳先を修正していた船頭が多田留太は、緊張してマニラ・ロープの命綱をにぎりしめた。綱は海中から、小刻みに連続してひかれた。緊急の合図である。ふだんはもう一人、綱持の修次が乗組んでいて、命綱の信号連絡や、コンプレッサーからの送気量の調整は綱持の役目だったが、修次が二日酔いで休んでいたので、彼は二人分をつとめなければならなかった。多田留太は船底に足をふんばり、大急ぎで命綱をまき上げようとした。しかし奇妙なことに、次の瞬間、綱はその信号をうちけして、ゆっくりと一度大きくひき直された。

彼は途方にくれた顔付になった。

「秋姐んやつ、何の悪さばしよつとじゃるか……」

そのとき秋姐もまた、海中でさけび声を上げていた。

「アイゴどうしよう！」

朝鮮語とチャンボンのさけびである。しかしそのさけびは、ヘルメットの中でいたずらに反響し、答える者もなく送気ホースに吸われて消えた。

海底に横たわっていたのは、女の死体だったのである。女はいったん、近づいてきた秋姐を見上げるように、水圧をはねのけながら上半身をおこした。頭髮がモズク藻のように光りながら、白い額をなでていつてさかだった。

醜い兎唇うづくちかと思われた唇の端から、吸いついていた藻魚もうおが一匹ついで礫のように落ちた。俗に眼張るという、小さい体に黒い雲状紋をもった、目の大きい、かさご科の異様な稚魚だ。やわらかい死体の唇を、食べていたのである。

「アヤヤーアヤー！」

秋姐はもう一度、痛切なうめき声を出した。

若い女、それも少女のようなあどけなさをたたえた、美しい女だった。濃く粧った死化粧の面に、思いつき大きく見開かれた黒い瞳ひとみが、面ガラスの奥の秋姐をのぞきこむようにしていた。

水圧にそこなわれたり、蟹や魚につつき荒された様子もない、まだ真新しい水葬死体。全身を白いキャンバス・シートで包まれ、ロープでぐるぐる巻きにしてある。腰のあたりに、バラストか何かの錘おもりりが巻きこんであるらしく、下半身をおこしてうき上ることはできない

でいる。彼女はいやいやをするように、頭をふって、何かを訴えていた。鍾りをすて、ロープをきり、キャンバスから出して、自由にしてほしいというように。

朝鮮からの密航の途中、船内で急死した同胞にちがいがなかった。対馬を眼前にした密航者の仲間たちは、せめて島近くの海底に葬ることで、彼女の希望をかなえさせてやりたかったにちがいない。むろん、死体をついでの上陸などは危険で、思いもよらないことだったから。

秋姐は手カギを両手でにぎりしめながら合掌して、おそろおそろ死体に手をふれた。水葬死体ならば、携帯していた彼女の小物は、全部キャンバス・シートの中におさめられているはずである。遺品の一片をもちかえって、ひそかに南無阿弥陀仏の一つもとなえてやりたかった。同じ済州島デユデユトの出身かも知れないと考えると、それは果さねばならぬ義務のように思えた。

注意深く胸のあたりのキャンバスを、手カギでひき裂いたときである。組みあわされた女の両手の下をすりぬけて、一枚の紙切れが水中にとび出してきた。腰の強い紙質であまり水を吸っていないらしく、紙切れは渦潮の流れにあおられるように舞い上った。

秋姐は命綱をはげしくひいて、移動の合図をしながら岩をかけた。紙切れは、水中に影を落している舟の下をくぐりぬけて、彼女を翻弄はんろうするように外海の方へにげた。紙切れに書いている数字らしいものが、ブリズムのように水中をさしている西陽にしびの原色をにじませて舞う

のが見えた。それが命日をしたためたものなら、紙切れはどここの誰か女の身元を証明するものに相違ないと、必死にもがいて追った。

「何取ったとか？」

秋姐が舷側のはしごのそばにうかび上ってきたとき、留太は大声でどなりつけた。悪戯にしては念が入りすぎてるようだがまんしていたのに、秋姐が手にしているのが、濡れてベロベロになった紙切れ一枚だとわかると、かんしゃく玉を爆発させたのである。彼は酒やけのした頬をふるわせて、手をさしのばし、紙切れをもぎとった。

半紙大の模造紙は、二つにさけた。あわせて見ると、ポスターかビラのようなものらしく、小ささまざまの活字体で印刷された文字が繋がった。朝鮮語をしゃべることなら、多少はできる彼にも、皆目読めなかった。九、三十という数字のほかは、全部、棒と丸でできた音字の諺文だったのである。

「こりや、何を書いてあるとか？」

舟に上った秋姐が、ヘルメットをぬぐのを待って、留太はいくらか語気をやわらげながらたずねた。

潜ってばかりいるので、すこしも陽焼けせず、色白で堅肥りのした顔である。秋姐は二十九歳の寡婦だった。大阪の鶴橋には、終戦前に彼女の手をひいて移住し、いまでは働けなくなってしまった海女上りの老母と、五つになる女兒とが、留守を守っていた。海女は海底